

龍角寺出土土器の年代

—印旛郡の紀年銘墨書土器との比較を中心に—

高橋 亘・横溝 優（1）高林 奎史・梶原 悠渡（2）

（1）早稲田大学大学院文学研究科 （2）早稲田大学文学部

1. 龍角寺出土土器の概要

早稲田大学の龍角寺II期3次調査では、多量の土器が出土した。縄文・弥生土器はほとんどみられないものの、AMS年代測定（[城倉ほか2017](#)）やその形態から6世紀前半と推測される古墳時代土師器が住居SI1520から出土したほか、中世土坑SK1508やその上層から常滑焼の大甕を含む、中・近世陶磁器が出土した。

本調査で最も多く出土したのは古代の土師器・須恵器であり、その大半は廃棄土坑SK1501で検出された。SK1501は、埋土にレンズ状堆積が認められなかったほか、完形の土師器・須恵器が多く出土したことなどから、一括廃棄土坑と考えられる。また、出土した土師器・須恵器のほとんどが壊であり、多くに灯明の痕跡がみられる点が特徴である。

本発表は、出土土器のうち、廃棄土坑SK1501出土土器群の年代的位置づけを行うことを目的とする。

2. 対象と方法

SK1501出土の土師器には、非ロクロ土師器も含まれるが、後述の定点年代資料には非ロクロ土師器が含まれない為、本発表ではロクロ土師器と須恵器を分析対象とする。

龍角寺が位置する印旛周辺では、長文墨書土器の出土例が多く見られる。特に紀年銘墨書土器は、印旛地域の定点年代資料として、SK1501出土土器群の年代決定の参考となる。具体的には、[表1](#)のとおりである。本発表に当たって、龍角寺SK1501出土のロクロ土師器壊・須恵器壊43点と、[表1](#)の定点年代資料を中心とした

土器群28点（①と共に伴する土師器壊と須恵器壊、②の土師器壊・共伴する土師器壊、④の土師器壊・共伴する土師器壊、⑤の土師器壊、⑥の土師器壊・共伴する土師器壊と須恵器壊）の三次元データを、Creafom社 Handy Scanを用いて取得した。スキャン解像度0.2mmで計測し、付属ソフトウェア VX Modelを用いて整列と断面の作成を行った。

作成した断面データを用いて、底径と口径を計測し、それぞれの口径底径比（口径÷底径）と口径器高比（口径÷器高）を算出した。なお、定点年代資料共伴土器のうち、スキャンできなかつた資料については報告書（[千葉県文化財センター1999](#)、[八千代市遺跡調査会2004・2005](#)）記載の法量を用いて計算を行った。算出した数値は、最小値・最大値・平均値を定点年代順に、ロクロ土師器については表2、須恵器については表3に示した。

表1 印旛周辺の紀年銘墨書土器

No.	遺跡	器種	定点年代	墨書
①	印西市 池ノ下遺跡 3号住居	土師器 小型甕	延暦2年 (783年)	「下総国埴生郡酢取郷車持口／口曆二年正月十四日」
②	八千代市 上谷遺跡 A116住居	土師器 壊	延暦10年 (791年)	「物部真依口／延暦十一年十一月七」
③	八千代市 上谷遺跡 A193住居	土師器 甕	延暦10年 (791年)	「下総国印旛郡村神郷丈部口刀自咩召代進上延暦十年十月二十二日」
④	印西市 鳴神山遺跡II 004号住居	土師器 壊	弘仁9年 (818年)	「口弘カ仁九年九月廿」
⑤	八千代市 上谷遺跡 A226住居	土師器 壊	弘仁12年 (821年)	「廣友進召代弘仁十二年十二月」
⑥	八千代市 上谷遺跡 A036住居	土師器 壊	承和2年 (835年)	「承和二年十八日進」

表2 定点年代資料の器形変化（ロクロ土師器）

遺跡	定点年代資料	層位	対象遺物	口径÷底径 (平均)	口径÷器高 (平均)
池ノ下遺跡 3号住居	土師器小型甕 延暦2（783）年	上層	定点資料 共伴土器	1.743～2.000 (1.858)	2.609～3.200 (2.985)
上谷遺跡 A116住居	ロクロ土師器壺 延暦10（791）年	床直	定点資料 下層土器	1.750	3.051
		覆土	定点資料	1.493	2.564
上谷遺跡 A193住居	土師器甕 延暦10（791）年	覆土	定点資料 共伴土器	1.615～2.250 (2.043)	2.822～3.900 (3.345)
		覆土	定点資料 共伴土器	1.395～1.846 (1.507)	2.250～3.588 (3.000)
鳴神山遺跡II 004号住居	ロクロ土師器壺 弘仁9（818）年	覆土	定点資料	1.896	3.432
		覆土	定点資料 共伴土器	1.642～2.016 (1.818)	2.512～3.235 (2.980)
上谷遺跡 A226住居	ロクロ土師器壺 弘仁12（821）年	覆土	定点資料	1.894	3.500
		覆土	定点資料 共伴土器	1.685～1.934 (1.799)	2.465～3.105 (2.882)
上谷遺跡 A036住居	ロクロ土師器壺 承和2（835）年	覆土	定点資料	2.200	3.300
		覆土	定点資料 共伴土器	1.400～2.229 (1.845)	2.727～3.500 (3.083)
龍角寺 SK1501	—	—	出土土器群	1.267～2.000 (1.577)	2.286～3.421 (2.737)

3. SK1501 出土土器群の年代

定点年代資料4点の口径底径比を見ると、上谷遺跡A116号住居から順番に1.493、1.896、1.894、2.200と徐々に数値が大きくなる傾向が見て取れる。また、口径器高比については2.564、3.432、3.500、3.300となっている。つまり、口径に対して底径が小さくなる方向に器形が変化していることが分かる。定点年代資料は全て住居内覆土から出土しているため、定点年代資料共伴土器は時期差や年代幅を持っていると考えられる。特に、池ノ下遺跡3号住居上層、上谷遺跡A116号住居覆土については、出土状況等を鑑みると、かなり時期差・年代幅を持っていると推測でき、それぞれの数値も少し大きくなっているが、その他の共伴土器群の口径底径比・口径器高比をみると概ね定点年代資料と同様の傾向がうかがえる。

以上を総合すると、ロクロ土師器の底径口径比（平均）は8世紀代では1.4～1.8前後の数値を示し、9世紀代に入ると1.8～2.2前後の値を示す。口径器高比（平均）は年代ごとの傾向は見えず、全体として2.5～3.5の値を示す。

定点年代資料と共に伴する須恵器壺の口径底径比（平均）は、池ノ下3号住居下層から順に、1.570、1.689、1.910、1.794、1.815と徐々に大きくなり、口径器高比（平均）は、3.612、3.571、3.125、3.158、3.281と徐々に小さくなる。つまり、口径に対して底径が小さくなる一方で、口径に対して器高が高くなる方向で器

表3 定点年代資料の器形変化（須恵器）

遺跡	定点年代資料	層位	対象遺物	口径÷底径 (平均)	口径÷器高 (平均)
池ノ下遺跡 3号住居	土師器小型甕 延暦2（783）年	下層	定点資料 下層土器	1.461～1.702 (1.570)	3.410～3.939 (3.612)
上谷遺跡 A116住居	ロクロ土師器壺 延暦10（791）年	床直	定点資料 下層土器	1.689	3.571
		覆土	定点資料 共伴土器	1.861～1.958 (1.910)	3.116～3.133 (3.125)
上谷遺跡 A193住居	土師器甕 延暦10（791）年	覆土	定点資料 共伴土器	1.614～2.077 (1.794)	2.881～3.784 (3.158)
		覆土	定点資料 共伴土器	1.724～1.953 (1.815)	3.047～3.571 (3.281)
龍角寺 SK1501	—	—	出土土器群	1.619～1.920 (1.784)	2.667～3.302 (3.035)

形が変化している。ロクロ土師器同様、上谷遺跡A116号住居覆土の出土状況を鑑みると、口径底径比（平均）は8世紀代は1.5～1.7前後であり、9世紀代に入ると1.8前後であることが分かる。また口径器高比（平均）は、8世紀代は3.6～3.1の間で徐々に減少していくが、9世紀代に入ると3.2と少し増加する傾向がみてとれる。

底部調整なども参考にしつつ、龍角寺SK1501出土のロクロ土師器壺・須恵器壺の口径底径比・口径器高比それぞれの平均値と、定点年代資料の口径底径比・口径器高比を比較して考えると、当土器群の年代は、8世紀後半であり、SK1501への廃棄年代は、鳴神山遺跡II 004号住居以前かつ上谷遺跡A116住居以降の8世紀末頃、下総国府編年（市川市教育委員会2001）の3a期後半と結論付けられる。

引用文献

市川市教育委員会 2001 『下総国府跡』
城倉正祥・ナワビ矢麻・渡邊玲・青笛基史 2017 『下総龍角寺の発掘（II期3次）調査－遺構編－』『プロジェクト研究』12
千葉県文化財センター 1999 『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書II－印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡－』
八千代市遺跡調査会 2004 『千葉県八千代市上谷遺跡－第4分冊－』
八千代市遺跡調査会 2005 『千葉県八千代市上谷遺跡－第5分冊－』

表出典

表1～3 取得データ及び各報告書掲載データを基に発表者ら作成。